

次世代型英語教育について考える グローバル・コミュニケーション&テストイングが 第5回主催セミナーを開催

第5回グローバル・コミュニケーション&テストイング(GC&T)主催セミナー「次世代型英語教育へのチャレンジ」が、東京と大阪の2会場で開催された。グローバル化と英語教育改革が進む中、身につけるべき真の英語力とは？をテーマに英語教育の課題や新たな指導法が語られた。ここでは、9月24日に開催された東京会場の模様をレポートする。

これから求められる 外国語教育

「日本の英語教育改革への期待と指導者に求められること」をテーマに、向後秀明氏(敬愛大学国際学部国際学科教授、前文部科学省初等中等教育局教育課程課・国際教育課教科調査官)が、基調講演を行なった。

日本の英語教育は、今後10年間で世界標準を目指している。英語の必修科目では、高校1年生終了時にCEFR A2レベル、選択科目で高校卒業時に、B1レベルの英語力を備えているこ

とが設定目標だと語った上で、「10年後にこのレベルに到達しないと絶望的」だと向後氏は警鐘を鳴らす。

教育改革の中では、主体的、多面的で深い学びことが掲げられているが、英語はあくまでも外国語という枠組みだということを忘れてはいけないとし、「外国語においては技能を統合させて、例えば様々な見方ができる話題を読んで、情報を整理して引用しながら自分の意見を構築し、グループでアイデアをまとめるのが外国語でいうところの主体的、多面的で深い学びだと個人的に

は思っています」と続けた。



向後秀明氏

『TOEFL Junior』 『TOEFL Primary』の活用事例

GC&Tが提供する『TOEFL Junior』、『TOEFL Primary』の活用事例も紹介された。

日出学園中学校・高等学

活気に満ちたパネル ディスカッション

最後に登壇者全員で「めざすべき英語力とその育成を可能にする指導とは？」をテーマに、パネルディスカッションが行われた。

教育改革、または大きく変化をしている社会の現状の中で、次世代型英語教育とは何か？

「最終的には、子供たちがどういうモチベーションを持って英語学習に取り組むかがキーになります。入試だけを目標に考えさせていくことは社会から置いていかれてしまう」(向後氏)

「子供たちがどうがんばっていてもネイティブスピーカーになることはない。その中で、担任、英語の教員が英語を使う姿を見せないと、どうして子供が自分の未来像を想像できるか。そういう意味でノンネイティブスピーカー

であることの意義を大切にしながら授業をしていただきたいです」(町田氏)

「ミスは大歓迎だと生徒に伝えていきます。わからないところを探してくるのが宿題で、ミスがないといい授業が私ほできないからと伝え、子供たちのミスを正解に導いていく授業が重要になります」(石川氏)

「ICTは様々な職場で使われています。例えば、プログラミングの世界では、日本よりも世界の方がすごいスピードで発展しています。海外のプログラミングのQ&Aサイトで、質問を英語で書き込めば、世界中の人々が最先端の答えを教えてください。英語はツールだと

言われますが、その実例を先生が見せることで、『なぜ英語をやらないといけないの?』という子供たちの疑問が解消されるのではないのでしょうか」(荒牧氏)といった意見が挙がった。

校の石川茂氏は、同校では1日を使って『TOEFL Junior』をはじめとしたいくつかの外部英語試験を全生徒に受験させると語る。

そのメリットとして、その後の勉強への取り組み、あるいは大学入試・就職試験等に生かすことに繋がることをあげ、「だからこそ学校で実施することの意義があり、英語に興味がない子もスコアがつくと興味を持つてくれます」と石川氏は言う。

国際教養大学の町田智久氏は教員の養成も担っている。その中で、秋田県大仙市東大曲小学校の『TOEFL Primary』を使った事例が紹介された。

授業は、学級担任と英語教育を専門とする大学教員

パネルディスカッションの間には、参加者同士でディスカッションする時間も用意され、非常に活気ある場が形成されていた。

セミナーの締めくくりには、GC&T代表取締役社長の梅澤直臣氏が『TOEFL Junior』と『TOEFL Primary』を使って、日本人の英語の底上げができるよう、色々な企業団体と連携していきたいと思えます」と語った。今後のGC&Tの取り組みにも期待せずにはられない。



パネルディスカッションの様子

とのチームティーチングで行われる。打ち合わせは授業前の15分、授業後の45分。英語の授業は英語で行われるが、小学校での担任の教員は英語の先生ではないため、表現集を作成してフォローをしている。

その上で『TOEFL Primary』を年3回受験させ、どれだけ覚えたかではなく、どれだけ英語を使えるかを図るためのテストとして活用している。

最初こそ戸惑いを見せていた同校の教員も、「チャレンジしている子供たちを見て、結果が見えてくると自分も頑張らないういけないうなど思う」と語るようになり、「ハードルが高いと思っていましたが、超えてみたらハードルが高くない」という声に変わったそうだ。

ミニワークショップでは、IGS(Institution for a Global Society)株式会社執行役員の荒牧国晴氏が登壇し、同社が提供する『e-Spire』



参加者同士のディスカッションの時間も用意された



パネラーへの質問も多かった



梅澤直臣代表取締役社長



荒牧国晴氏



町田智久氏



石川茂氏